



法華宗信報



◀昭和15年 室蘭市
法華寺教会所(現在の経王寺)
北海道学僧講習会

昭和28年北海道教区第2回教学講習会
本因寺創立50年記念慶讃法要
▼併修 開基日慧上人第23回忌法要



平成30年テーマ

つむぎ せん
紡ぐ田



- ご挨拶／大本山本興寺 小西日邊猷下
- 寺院の歴史／俱知安町 本因寺 ～前編～
- 北海道開教先師上人報恩法要
- コラム／私の住職日記
- 連載／編集員のおすすめ
北海道の観光スポット～札幌～

156

平成30年7月1日
発行 法華宗宗務院

盂蘭盆の季節に想うこと

ご挨拶

大本山本興寺貫首 小西日遼 にちじょう



盂蘭盆とは七月十五日に亡き人の菩提を引うために、施餓鬼などの法要を行うこととされ、歴史的には『日本書紀』推古天皇十四年四月条に「是年より初めて毎寺七月十五日斎を設く」とあるので、公家社会では奈良時代から行われて来たと思われます。日蓮大聖人は『盂蘭盆御書』に「盂蘭盆経」を引かれ、お釈迦様の弟子で神通第一と言われた目連尊者が、自分の母親が餓鬼の罪

で餓鬼道に堕ちていることを知って救おうとしますが叶わず仏様に救いを乞い、七月十五日に衆僧を集めて百味の飲食を供養したところ母親は救われました。大聖人は神通力のある尊者が母を救えなかったのは、戒律を持つても仏になれなかったためであり、戒律を捨てて法華経を信ずることによって母親も救われたとして、

目連尊者が法華経を信じまいらせし大善は、我が身仏になるのみならず、父母仏になり給う。上七代下七代、上無量生下無量生の父母等存外に仏となり給う。乃至子息・夫妻・所従・檀那・無量の衆生三惡道をはなるのみならず、皆初住・妙覺の仏となりぬ。

と説かれました。現在盂蘭盆は地域によって七月と八月に奉修されますが、御縁のあった故人や各家の先祖を引う行事は盛んに行われております。またこの時期には各地でやぐらを中心にくるぐると回りながら踊る盆踊りが盛んになります。これはお盆にこ



▲サルビア／見頃時期7月（富良野市）



京都五山の送り火

の世に帰られた諸霊を送る行事とも言われております。また霊を迎え、送る時に火を焚くということがあります。有名なのは京都五山の送り火です。さらに観光化されていますが秋田の竿灯や青森のねぶたもお盆の精霊おくりの行事なのです。このように我国では今日まで、各地でお盆に関係する行事が行われてきましたが、これはそれだけ人々が自分達と縁のある霊位を想い、先祖を霊界からこの世に迎え、お盆の間は御供養し、お盆が終わればまたお送りするという行為を繰り返してきたのです。

しかし、一方で、昨今、先祖代々の墓地进行する墓じまいや、遺骨を埋葬しない散骨が増えて、人々の先祖供養に対する意識が薄らいだと言われます。これは私達の高齢化や経済的な問題も一因と思われますが、多くの家族が両親の家庭と若い子供達だけの家庭に分かれた結果、若者が、日常的な先祖供養の作法を見なくなったこと、また家族の臨終から葬儀までの諸行事に直接関わらなくなり、霊界に旅立った故人の霊を祀るという意識が薄らいでいると思われる。私達の御先祖は常に各家庭の家族と一緒に居られます。日頃から御先祖への御供養を大切に致しましょう。

合掌



秋田の竿灯まつり

法華宗 北海道寺院紹介

「本因寺」 前編

北海道の日本海側後志地方の蝦夷富士と呼ばれる羊蹄山の麓、倶知安町に「本因寺」がある。開基上人である渡辺日慧上人は明治三十六年に倶知安の地に來られて、法華信仰の灯を掲げられた。その経緯についてご紹介させて頂く。

開基渡辺日慧上人

日慧上人は万延元年（二八六〇）に当時の土佐国高知市の出身で、幼少の頃より仏事を好み、



ニセコスキー場から見た羊蹄山麓

依したのである。地位も名誉も全てを投げ捨てられた日慧上人は、一介の沙弥に降りられ法華宗の僧となった。

正法の前には体面に拘らず



開基渡辺日慧上人

日慧上人が渡辺伊平師の存在を知られた理由は、某檀徒の迫害の席で、ある参列者から日慧上人の奉ずる身延一統の教義を批判され、本門八品勝劣の教義に練達した渡辺伊平師が日高の静内にいることを告げられたからである。その上で静内まで赴き、法論を交えることとなる。

日慧上人の手記によると、明治三十三年八月二十九日より三日間身延山で布教し、終わって同年九月十四日に立出し、日高国静内郡静内村字碧葉村へ向かい、そこで渡辺伊平師と邂逅し、十七日、十八日、十九日の三昼夜に亘って法論の後、日慧上人の御聖教を拝して、本途の法義を明に解了し断然転宗

と綴られている。
手記ではこの法論の後、
十月八日より蓮華寺に於いて、毎朝本座相對
の大法鼓を鳴らす。
十一月二十一日の朝、四十余名の檀徒に四方
を囲まれて罵詈雑言され、師檀の縁を切り退寺する
ことを決める。そしてすぐに時の管長、本山に
対して陳情書を奉呈し、僧階、勤役、住職を辞す。
と綴り、一介の沙弥に降りられ、明治三十四年
に当時の法華宗管長大本山本興寺第一〇三世大
僧正服部日義親下（兵庫縣淡路島・妙京寺歴代）
の徒弟となり、当宗の僧となったのである。そ



昭和時代本因寺旧本堂

の後、明治三十六年に倶知安の地に移り、本能
寺本興寺両大本山出張所を開き、明治三十八年
に本因寺前身である説教所を建立する。

不幸を乗り越え宗門繁栄を願う

日慧上人は当宗に転派した後も全国を回り布
教に努めるなか、大正四年に病床に伏すことにな
る。強い胃の痙攣を起こし四十余日の間、一時は危篤になるといふ状態まで至る。この病
症を乗り越えようと、日慧上人は仏天の加被力に
よって全癒したと云い、返って壮健の身となつ
たと示された。

明治から大正にかけてのこの時代には、他に
数多くの不幸が重なった。大正三年に次男俊成
師が二十二歳で遷化すると、翌年には実母が病
死。また大正五年には恩師服部日義親下が遷化
された。これらのことに加え北海道内の各寺院
に於いても、明治四十四年に村上嶺龍上人、大
正二年に大平英玉上人、大正五年に徒弟の頼俊
常上人、大正七年に丸山林昌上人と北海道開教
弘通の多くの上人の遷化を目の当たりにする。
この諸師の遷化は、ご自身をはじめ北海道の宗
門にとっても大変な悲痛であったことは容易に
想像できる。しかしながらこの様な状況の後に
も、弟子の養成、各地への布教を行い宗門の繁
栄に努めていくのである。昭和六年、七十二歳
をもって遷化されるまで、法華経の行者としての
地まぬ努力が垣間見える。
日慧上人の徒弟の方々の教線を挙げると、四
男俊幸師の旭川市白蓮寺での布教をはじめ、



平成13年建立本因寺現本堂

頼俊常上人は豊浦町本法寺、山田俊行上人は斜
里町本行寺と室蘭市経王寺、堀内俊経上人は弟
子屈町法華経寺、芳賀俊應上人は豊浦町感應寺
と平取町本應寺と、北海道内各所に布教所並び
に寺院を設立し、教線を拡げられた。日慧上人
の法華信仰の法燈は、北海道内の各寺院の礎と
なっていくこととなる。

【次号へ続く】

※本因寺開基渡辺日慧上人手記「隱自意」より抜粋
※参考文献「宗門史話」第四号

北海道 開教先師先上人報恩法要

法華宗北海道教区青年会の活動を知って頂きたい想いの一つとして、毎年行われている「青年会冬季錬成会」という修行の機会があります。北海道は先の情報でも紹介させていただいたように、今年は「北海道」と命名され150年の節目の年であり、法華宗（本門流）が明治18年に本州より宗教移住の偉業がなされて、133年を迎えます。

そのような中で以前より教区の想いとして、開教先師先哲上人（115人が遷化・平成30年現在）への報恩感謝の気持ちを持ち続けてきました。



この度は虹田郡倶知安町本因寺を会場にお借りし、大本山本興寺塔頭菊田俊浄先生を講師にお迎えし、平成三十年二月十三日より十五日までの二泊三日、「青年会冬季錬成会」が開催されました。

冬季錬成会は北海道という土地柄、道内青年僧達が集まることがとても困難な中で、宗内より講師をお招きして、講義を拝聴研修し、学ぶことができる貴重な時間なのです。

その冬季錬成会時間割の中で「開教先師先上人報恩法要」を錬成の一環として、本因寺 渡辺俊岳御住職のご指導を受け、講師菊田俊浄先生、青年会会員外の近隣住職の賛同参加があり、錬成参加の青年会会員の出仕により法要を奉修いたしました。

法要は出仕僧の声高らかな法華経読誦、題目口唱と併せ、御住職が開教先師先哲上人一一五名全ての遷化年月日、上人、大徳、法師、法尼の法名を読み上げ、ご回向申し



上げると共に、出仕の各僧侶は先師先哲上人が遺してくれた血脈、足跡、遺業に感謝の気持ちを捧げ、御恩に報いた読経唱題でありました。

我々がこの時代に法華經を受持・読・誦・解説・書写（五種法師・五種の修行）出来るのも、全ては先人が北海道開拓・開教の中で艱難辛苦しながら、脈々と承継して下さったお陰を以て培われた信仰・信心であると感じた冬季錬成会でありました。

最後に北海道の歴史は本州に比べると大変に歴史の浅いものではありませんが、その中で育み、先人が積み重ねてきた歴史と努力精進は、決して劣らないものであることを強く感じます。これから先の一五〇年ほどのような形で歩んでいくものかは想像もつきませんが、我々の信仰心を以て僧俗が継承し、北の大地に、お題目が拡がっていくことを信じていきたいものであります。

編集員のおすすめ

北海道の観光スポット

当編集員が北海道各地のおすすめスポットを独断と偏見を交えて紹介します。

札幌市 藻岩山から見る風景

藻岩山は、札幌の中心部から車で10分程度で麓に着ることができ、中腹の藻岩山中腹駅まではロープウェイを利用して上がります。山頂まではミニケーブルカー「もーりすカー」で行くことができます。季節良い時期には藻岩山中腹駅と山頂駅の間にある遊歩道を登ることもできます。

標高531メートルの藻岩山山頂の展望台からは札幌の街並みや石狩湾、増毛温泉別荘までの大パノラマを眺めることができます。

また、藻岩山から見る夜景は、平成27年長崎市の神戸市と共に「日本新三大夜景」として認定されました。澄み切った空気の中で、ナトリウム灯の温かい光が多い大パノラマの夜景は見応えがあります。夏でも平地より2〜3℃気温が低く、真冬はかなり寒いので服装を考えて行った方が良いでしょう。

藻岩山はアイヌ語では「インカルシベ（いつも上って見張りをするところ）」と言われていた。また、その隣にある丸山が「モイワ（小さな山）」と言われていた。しかし、明治政府の役人が地名を登録する際、間違えて隣の山のモイワを現在の藻岩山に名前を登録してしまったそうです。これが藻岩山の名前の由来です。



「私の住職日記」第4回

「ファミリーヒストリー」

苦小牧妙見寺住職 末澤隆信

3月下旬、亡き母サチヨの親友トキさんが、突然妙見寺を訪れた。昭和2年生まれの91歳。母と同じ北海道日高地方静内の生まれ育ち。いきさつはこうだ。今年始め新聞に載った、妙見寺読書会の紹介記事。大きく写った私の写真を見たトキさん。「あ、これはあのサッチャンの息子だ!」と叫んだ。そばにいた人が「私もこの人知ってます! 苦小牧のカウンセリング講座で会ったことがあるお坊さんです」という返えが返ってきて、トキさんはその偶然に感激し、その人に車の運転を頼み込んで、住んでいる平取町から苦小牧にやってきたのだ。

静内の豊畑地区にある久遠寺の住職だった祖父、その娘である母、そこに随分していた父。80年以上前のことを昨日のように生き生きと語ってくれる。「サッチャン、今ここにいます」と言い切ってくれる。そんなトキさんの姿から、母が持っていた空気と同じものが伝わってきて、懐かしくて、うれしくて、涙が流れた。母やその兄弟達が懸命に生きてきた話を聞いたら、なぜだか元気がでた。いろいろなことで疲れていた自分に、しっかりしろと励ます人が今日遺されたのだと思った。

牛が草を食み、馬のたてがみが揺れる緑のまきば。開拓に全身全霊をかけて生きた人々の町。私の魂はあの風景、あの土地からやってきた。そう思うだけで力が湧くのはなぜだろう。両親、その兄弟、そこに関わった人たちのかつての話を聞くこと。今、ファミリーヒストリーが評価されている理由がわかる気がした。

浪人が決まり新聞配達奨学生として札幌の予備校に行くことになった次男に、夕食の時そのことを話した。「おとうさん、読書会とかカウンセリングとか、好きなことをやり続けたら、そこで出会う人がどこかでつながって、会いに来てくれて、元気をもらえた。そういうことってある。だから遠慮せず、いろんな人に出会ったらいいい」そんなことを、人づきあいのとても苦手な彼に話した。我が子が果立っていく春、この日の訪れがありがたい計らいに思えてしょうがなかった。



妙見寺本堂にて

編集後記

皆様「イランカラブテ」

そろそろ、この挨拶も覚えてもらえたでしょうか。アイヌ語で「こんにちば」を意味しています。もとよりアイヌ民族は文字を持たない民族でした。歴々と紡がれて来た民族の歴史は、全て言葉（アイヌ語）のみで歴史を語りつがれてきました。時には伝承、叙事詩（ユーカラ・ユカラ）を詩や踊りで表現し、それを代々伝えてきたのです。それは、明治二年（一八六九年）八月十五日に「北海道」と命名される以前から続いてきた歴史です。

最近では、今の日本人に足りないものを考える時にアイヌ民族が送ってきた生活や習慣を参考にしようではないかという考えや運動が増えてきているそうです。

法華宗信報

NO.156

平成30年7月1日発行 発行人/二瓶海照 編集人/千葉啓佑
編集部/〒078-0349 北海道上川郡比布町寿町1-2-8 本堂寺内
発行所/〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-19-1 法華宗宗務院
印刷所/富士プリント株式会社

TEL.0166-85-2657
TEL.03-5614-3055